

ストーリー

(1) 木曾地域と木年貢

長野県南西部、塩尻市から木曾郡にかけての木曾地域は、総面積1,836k㎡と小さな県に匹敵する広さを有する。遥かに仰ぐ御嶽山は「古」より魂の還る霊山として人々の信仰をあつめ、その裾野を流れる木曾川は檜の山林と奇岩の溪谷を映し、木曾川沿いに街道木曾路が続く。

木曾路を包む木曾谷の約9割は森林地帯である。豊臣秀吉の時代、木曾地域は、狭い耕地の作物だけでは領民を養えない地域として、領民は米年貢（米の年貢）の代わりに木年貢（木の年貢）が課され、領民には木年貢を納めることで米が支給された。木年貢は、米が経済の基礎であった江戸時代になっても踏襲され、森林資源が木曾地域の人々の暮らしを支えていた。



妻籠城跡から見た妻籠宿(南木曾町)

(2) 木材需要の増大による森林資源の枯渇と厳しい森林保護政策

「木曾のナー なかのりさん 木曾のおんたけ ナンチャラホイ」と歌われる木曾節の「なかのりさん」とは檜を筏に組んで川を下る筏師のことだという。木曾檜は、木曾谷の代名詞ともいえる産業である。木目が緻密で優良な木曾檜は、鎌倉時代に造られた木曾谷最古の神社である白山神社など、古来神社仏閣建築に重用され、約330年前から、伊勢神宮が20年に1度、お宮を新たに建て替える式年遷宮の際に用いる御神木としても使われ続けている。



白山神社(大桑村)

この名木に危機が訪れたのは、江戸時代初期のことであった。戦国時代が終わり、安土・桃山時代以降、新たな町づくりが進められると、城郭・社寺建築の木材需要が急増し、全国的な森林乱伐をもたらした。江戸幕府から良材の無尽蔵の宝庫と目された木曾谷は、江戸・駿府・名古屋の城と城下町などの建設のために膨大な用材が伐り出され、深刻な森林資源の枯渇に陥ったのである。

木曾谷を所管する尾張藩は、江戸時代初期から木曾檜などの伐木への制限に乗り出した。この制限は、江戸時代中期には木曾谷のほぼ全域に及び、「木一本首一つ 枝一本腕一つ」といわれたヒノキなど木曾五木を伐れば死罪という徹底した森林保護となり、木年貢も廃止された。この施策は、山林乱伐を防ぐ森林保護政策の先駆であったが、森林資源で暮らしを立てていた木曾の領民にとっては厳しい経済統制となった。

(3) 木曾領民の暮らしを支えた地場産業

森林保護政策により山での採集を制限された木曾領民には、木曾の風土に根ざした地場産品の生産が奨励された。

木曾代官4代目山村良豊は、奥州から良馬の南部馬を買い入れ、木曾地域の風土に合う山坂に強い木曾馬に改良して、農民に飼育させることを奨励した。また、禁伐を課す代わりに領民の既得権として藩から村に支給される御免白木（使用が許可された材木を割って半製品にした材料）を利用したの曲物、漆器、お六櫛などの工芸品や木材加工、養蚕、生糸業、さらに御嶽山修験者から地元の人々に伝授された山野の薬草の製薬技術による「百草」製造などを地場産業として積極的に奨励した。地場産品と整備の進んだ中山道の流通経済を活かして産業振興を図ったのである。

木曾馬は、性格がおとなしく小型であるため女性でも世話できる農耕馬であり、馬市で売り買いされるだけでなく、領民の農耕・運輸にも大いに役立ち、江戸時代後期には領内に数千頭の木曾馬が飼育されていた。また、陶器に比べ軽く壊れにくい木工品や漆を施し耐久性を高めた漆工品は、木曾路を辿り全国に広まった。

こうして発展した木曾谷の地場産業は、江戸時代中期以降、領民の暮らしを支えた。



木曾馬と御嶽山(木曾町)



お六櫛(木祖村)

(4) 賑わう宿場の形成と地場産品の流通

木曾路は、鎌倉・室町時代までには信濃と京都・伊勢などを結ぶ重要な通路として発展していたが、江戸時代には、五街道の一つ中山道の街道整備とともに木曾 11 宿といわれる宿場が発達した。寝覚の床、棧、鳥居峠から遙拝する御嶽山など木曾谷の情景は、訪れた多くの俳人や浮世絵師などを惹きつけ、詩歌や版画となって世に知られるようになった。

宿場は訪れる人々を迎えることによる経済的利益の他に、木曾馬や木工品など地場産品の需要をもたらす生産・販売・運輸の拠点として賑わい、木曾谷の経済を牽引した。

奈良井宿は、幕府関係の公用旅行者や参勤交代の大名通行のために人馬を常備し、輸送・通信などの業務を負う代わりに一般の通行に対する独占的な稼ぎが許され、多くの旅行者の宿泊・休息のための旅籠や茶屋などが設けられていた。江戸時代中期には、宿場の規模は南北約 1 km に及び「奈良井千軒」と謳われ、常時 2000 人以上が働いていた。これは、宿場に職人町も構えていたためであり、奈良井宿は、木曾谷住民に許された御免白木 6000 駄のうち 1500 駄（1 駄は馬 1 頭が運ぶ荷物の量、約 135 kg）もの材料が割り当てられ、檜物細工や塗物、塗櫛などを多く産し、近くの漆工町木曾平沢とともに地場産業の木工品や漆工品の名産地になった。

妻籠宿は室町時代、木曾義仲の子孫義昌が木曾谷の南の備えとして整備した山城妻籠城の麓に形成された。江戸時代中期、規模は南北約 250m 程と 11 宿中最小ではあるが、人口は 400 人を超えた。これは、31 軒もの旅籠と地場産業に従事する人口が多かったことによる。江戸時代初期には宿場近くに木地師と呼ばれる「ろくろ細工」職人の集落があり、木工品の産地であったが、江戸時代中期、森林保護政策が強化されると村の庄屋が尾張藩に請願して檜物細工の御免白木の許可を得て、網笠の地場産業をおこした。農家の女性たちの手作業による蘭 桧 笠は、旅行者や僧侶の移動、農作業、茶摘み、舟下り、漁業、林業、土木など広範囲の用途に晴雨にかかわらず着用されたため、木曾路を通じて全国に広まった。

江戸時代中期、街道整備がすすみ庶民の御嶽登山が盛になると、全国から多くの御嶽山信仰の人々が訪れた。訪れた信者の数は、登山道沿いなどに建てられた霊神碑が数万基にのぼることからもその規模の大きさがわかる。御嶽山と木曾路を行き来する人々によって、木曾谷の流通はさらに促進された。室町時代以来、御嶽山麓の修験者が携帯したといわれる「そば」は御嶽山麓開田の特産となり、登拝のために訪れた人々などによって、木曾谷の地場産品や薬「百草」などとともに宿場から木曾路を辿り全国に広められた。

近代に入り、御嶽山麓の森林鉄道に木曾檜を満載した列車が走る。木曾谷の人々が守り続けた木曾檜は、再び木曾の代名詞として蘇った。そして、農家や職人町、宿場など木曾谷のあらゆる人々がそれぞれの生業を活かして発展させた地場産業は、全国に名高い在来馬や伝統工芸品などに結実した。

文豪島崎藤村の『夜明け前』は「木曾路はすべて山の中」で始まる。木曾谷の山と木曾路は、木曾谷の人々の「山を守り、山に生きる」暮らしを育んだ。その暮らしは、森林の保護、木曾路や宿場の保存、伝統工芸品の伝承を大切に思う心を 培い、今も木曾谷に息づいている。



寝覚めの床（上松町）



奈良井宿・江戸時代絵図（左）と現在写真（右）（塩尻市）



妻籠宿の町並み（南木曾町）



蘭桧笠製作（南木曾町）



霊神碑（王滝村）

